

2021年6月20日 説教「主に召されるまで」

詩篇 90 篇 1～17 節

今朝は最近のシリーズからではなく、詩篇 90 篇を通して学びます。

1. 朝に咲く花も夕べには (1～9 節)

①主は住まい (1-2)「主よ。あなたは代々にわたって、私たちの住まいです。山々が生まれる前から、あなたが地と世界とを生み出す前から、まことに、とこしえからとこしえまで、あなたは神です。」「主が私たちの住まい」というのは、主が私たちを守ってくださり、安らぎと、喜びをもたらしてくださる方、といった意味です。そして、天と地が創造される前から、主は詩人とその民の住まいとなっていてくださっていると告白しています。

②千年もきのうのよう (3-4)「あなたは人をちりに帰らせて言われます。『人の子らよ。帰れ』、まことに、あなたの目には千年もきのうのように過ぎ去り、夜回りのひとときのようなのです。」ここで人の死について、「ちりに帰る」とあります。そして、人の生死の主権は主にあることを確認されています。さらに、創造主である神にとって千年もきのうのようで、夜回りのひとときのようなのだと、伝えられます。この国の歴史でいえば、平安時代から現代までの千年ほどの年月ですらも、主にとっては昨日のようだというのです。それは単に通覧しているというのではなく、緻密なご関心をもちつつ、見守ってくださるのです。

③ひと息のように (5-9)「あなたが人を押し流すと、彼らは、眠りにおちます。朝、彼らは移ろう草のようです。朝は、花を咲かせているが、また移ろい、夕べには、しおれて枯れます。まことに、私たちは、あなたの御怒りによって消えうせ、あなたの激しい憤りにおじ感います。あなたは私たちの不義を御前に、私たちの秘めごとを御顔の光の中に置かれます。まことに、私たちのすべての日は、あなたの激しい怒りの中に沈み行き、私たちは自分の齢をひと息のように終わらせます。」人のいのちは、ある面でははかないのです。人生は短いのです。移ろう草のようで、朝に花が咲いたと喜んでいっていると、夕べになってしおれて枯れてしまうほどに、そのいのちは、あっという間なのです。一方、主は不義(罪)については厳しくあられ、聖なる神の光にその罪は明らかにされるのです。罪については神が厳しい目でみておられるということを知らねばなりません。また、私たちの齢は、ひと息がなされるほどだとも告白されています。
そのことを心に刻みたいものです。

2. 主のお心を知り、日を正しく数える (10～12 節)

①早く過ぎ去る (10)「私たちの齢は七十年。健やかであっても八十年。しかも、その誇りとするところは、労苦とわざわいです。それは早く過ぎ去り、私たちも飛び去るのです。」人間の寿命は時代によって

異なります。80年の寿命というのは、長寿国日本なら、「健やかであっても100年」と言われた方がピンとくるかもしれません。しかし、100年であったとしても、飛び去るほどに早く過ぎ去っていくとって間違いのないのです。

②主の御怒りを知らずに(11)「だれが御怒りの力を知っているでしょう。だれがあなたの激しい怒りを知っているでしょう。その恐れにふさわしく。」主の御怒り、激しいお怒りは、私たち人間が神を無視し、自ら力を過信するところに、生まれるのです。

③日を正しく数える(12)「それゆえ、私たちに、自分の日を正しく数えることを教えてください。そうして私たちに知恵の心を得させてください。」それゆえに、私たち人間が心がけるべきことは、主なる神をいつも覚え、神中心の生活をするることなのです。祈りつつ、御言葉に導かれて歩むなか、自らの人生を正しく数えることがなされていくのです。自分の日を正しく数えることによって、私たちに主からの霊的知恵が与えられるのです。

それゆえに、詩人は、与えられている時間を正しく用いることができるようにと祈るのです。

3. 主のご慈愛で手のわざを確かなものと(13~17節)

①朝には恵みを(13-14)「帰って来ててください。主よ。いつまでこのようなのですか。あなたのしもべらを、あわれんでください。どうか、朝には、あなたの恵みで私たちを満ちたらせ、私たちのすべての日に、喜び歌い、楽しむようにしてください。」人格神に方向転換を頼むほどの、大胆な祈りです。人間の罪の大きさはわかっている、主のあわれみが与えられるようにと祈るのです。そして具体的には、朝に主なる神の恵みで満ちたり、与えられた一日すべて、さらには生きる日々のすべてが、主を喜んで賛美の歌を歌い、主なる神にある日々を楽しむようにしてくださいと祈るのです。実際の私たちは、自らの肉が喜ぶことを求めやすいのです。

②霊的な楽しみを(15-16)「あなたが私たちを悩まされた日々と、私たちがわざわざに会った年々に応じて、私達を楽しませてください。あなたのみわざをあなたのしもべらに、あなたのご威光を彼らの子らに見せてください。」これもまた大胆な祈りです。悩んだ日々、わざわざにあった年々のなかには、いかんともしがたい因もあれば、自らの弱さや罪に基づくところもあったのです。でもそれらに、反比例するほどに私たちが霊的な楽しみに満ち溢れ、主のみわざや、主のご威光が、主のしもべたちに与えてくださるようにと祈るのです。

③手のわざを確かなものに(17)「私たちの神、主のご慈愛が、私たちの上にありますように。そして、私たちの手のわざを確かなものにしてください。どうか、私たちの手のわざを確かなものにしてください。」そして、主のご慈愛が罪深い私たちのうえに与えられるように、

私たちのなすところが、主の喜ばれるところとなりますようにと祈るのです。私たちの現実、霊的な喜びや楽しみよりも、肉の喜びを求めやすいからです。また、私たちは、主のゆえにという言葉を用いながらも、自己中心に陥りやすいものたちだとわきませたいのです。

《結論》

「ローマ帝国時代の政治家であり哲学者であったセネカはその著書「人生

の短さについて」において、「髪が白いか皺が寄っているといっても、その人

が長く生きたと考える理由にはならない。長く生きたのではなく、長く有ったにすぎない。」と述べています。私などには片腹痛い気持ちになります。この詩篇の作者(モーセ)は祈るのです。「自分の日を正しく数えることを教えてください。そうして、私たちに知恵の心を得させてください。」また、「朝にはあなたの恵みで満ちたらせ、私たちのすべての日に、喜び歌い、楽しむようにしてください。」と霊的な求めをするのです。

今からちょうど9年程前に大腸癌の手術を受けました。その時、病室でこの詩篇90篇を何度となく読み、「自分の日を正しく数えることを教えてください」と祈ったことでした。しかし、どうでしょう、健康が回復すればいつの間にか、与えられている時間を無駄にし、主にある霊的喜びを求めることよりも、肉の喜びを選びとってきてしまいました。改めて昨晩は悔い改めました。

そのように導かれたのには、言うまでもなく、先週の月曜日14日の朝に、私たちの主にある家族である新田恵美子姉が天に召されたことによります。姉妹は入院や施設滞在などを経て、一年余り前に自宅にもどっての療養生活に入りました。医師の先生方の見立てでも、残りわずかの人生であることを告げられました。しかし、暑い夏を越え、秋も深まると寒い日々を越えるのは困難だと思われつつ、冬を越えて、ご自宅の前の公園の桜の花の季節も越え、ついに入梅宣言がされたその日に召されたのでした。病院や施設であれば、家族であっても対面の面会ができないコロナ禍の日々。ご子息の眞人さんは大変でしたが、直接の交流と介護ができました。また日に二回のヘルパーさんの援助も得られて良い日々であったと思います。さらに、私どもも直接にお会いでき、行く度に「いつくしみふかき」(312番)を共に歌い、祈り合う時にも恵まれました。これ以上ない日々を経て、主が召されたのだと思います。

新田姉はその生涯において、踊りという天職が与えられたうえに、賛美舞踊という証しの道にも導かれ、それを人々にお伝えする

時にも恵まれました。主にある積極的な心を与えられて、あちらこちらに出かけて、賛美舞踊を指導する日々がありました。そして、何といても、この姉ヶ崎キリスト教会において、一年半ほど前までは、35年間共に礼拝をささげてくることができました。真人さんの助けを借りながら、つい数週間前までは、ラインを用いてのリモートで礼拝をささげることも何回となくできました。

新田姉は御国というもっとも麗しく喜ばしい場所に移されていきました。翻って、残された私たちに促されていることは、地上にあって、主なる神さまを覚え、十字架の主を仰ぎながら、歩いていくことでしょう。盲人の詩人クロスビーの作詞による讃美歌 495 番にこうあります。「我は誇らん、ただ十字架を、天ついこいに、いる時まで」。私たちも天に召されるその時まで、主を仰ぎつつ地上での日々を大切に歩いていきましょう。